


toyama design wave

富山で生まれる、次のデザイン。

2015

toyama design wave 2015




toyama
design
wave

富山で生まれる、次のデザイン。

富山デザインウェーブ 2015

10月1日(木)～10月6日(火) 10:00～19:00 (土日11:00～)
※オープニングセレモニー:10月1日11:00～

企画展「鈴木マサル・鈴野浩一・萩原修
クロスオーバー 地域が幸せになるデザイン・人が喜ぶスーベニア展」
富山デザインコンペティション2015 作品展
富山マテリアルワークショップ作品展

CONTENTS

- 03 デザインコンペティション
富山デザインコンペティション2015
- 11 富山マテリアルワークショップ
直径60mmの道具
- 15 デザインウェブ商品化プロジェクト
「富山飴」
「sou」
- 16 企画展
クロスオーバー
地域が幸せになるデザイン・
人が喜ぶスーベニア展
- 19 デザインセミナー
ジャンルの境界を
意識させないデザイン
講師/鈴木マサル 鈴野浩一 萩原修
- 23 デザインツアー
富山の建築デザインツアー
- 25 関連イベント
富山デザインウィーク
富山デザインウェーブ2015展
第55回富山県デザイン展
富山デザインフェア2015
工芸都市高岡2015クラフト展
高岡クラフト市場街

近年、人々の価値観やライフスタイルが多様化し、ものづくりには、高い機能性や低コストであることに加え、生活に潤いやぬくもりを与える優れたデザインであることが求められるようになってきています。

このため、富山県では、デザインの振興に早くから着目し、総合デザインセンターを中心に、デザインを活用した商品の共同開発や販路開拓の支援、デザイン人材の育成など、幅広い取組みを進めてまいりました。

なかでも、このデザインウェーブ事業は、「富山から世界に発信するデザインムーブメント」として1990年に開始し、今回で26回目を迎えました。優秀な作品の商品化を支援する「富山デザインコンペティション」を核とし、ワークショップ、展示会など、多彩な企画を実施しており、2009年には産業活性化を目的としたデザインイベントとして、グッドデザイン賞を受賞するなど、全国的にも高い評価をいただいております。

今年の「富山デザインコンペティション」では、富山の自然や産

業を生かし、多くの人の思い出に残るような「地域の魅力を伝えるスーベニア」をテーマに作品を募集したところ、県内外から226点の応募をいただきました。9月には公開審査会を行い、この中から「とやまデザイン賞」等を決定いたしました。

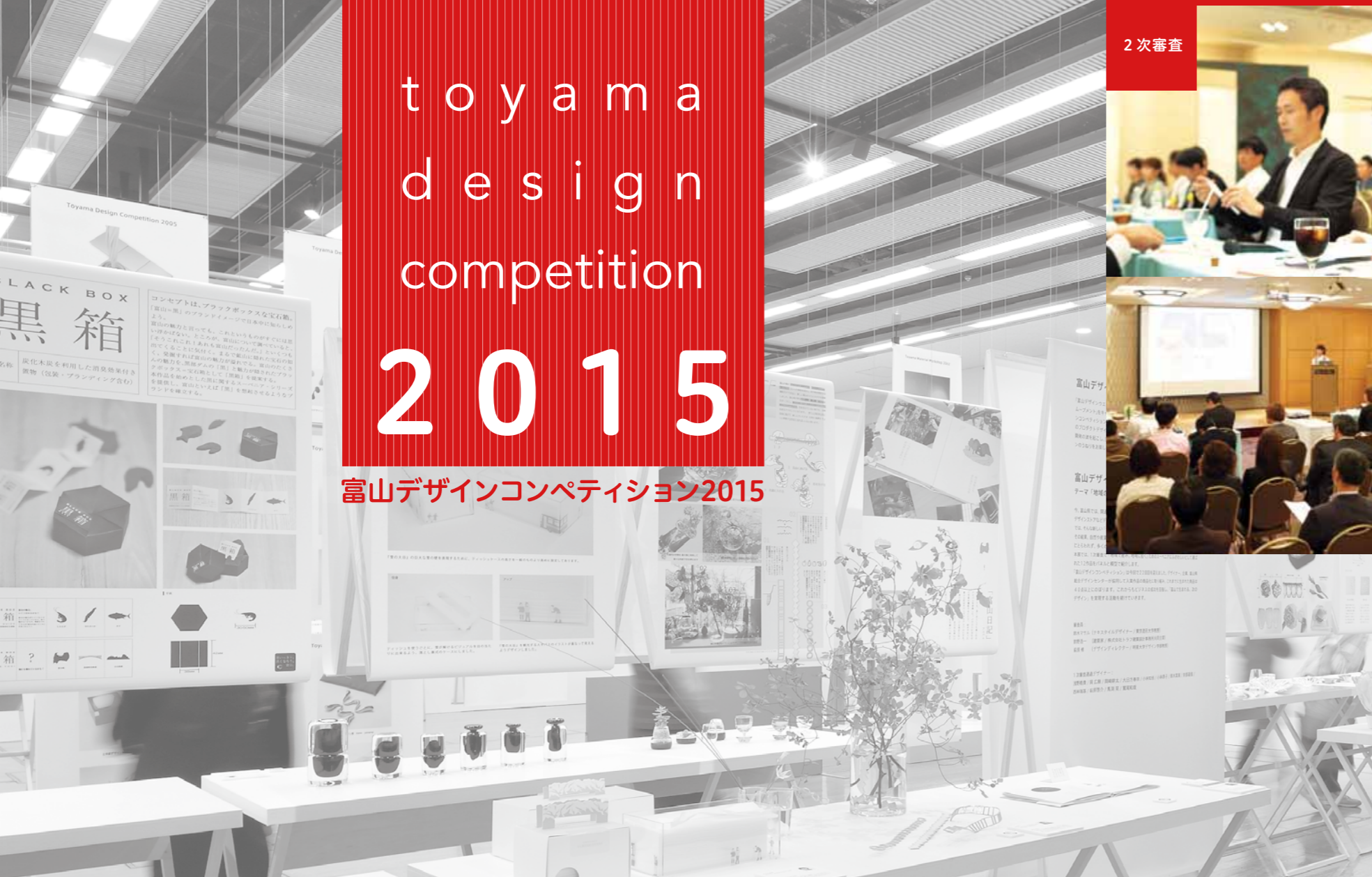
このデザインウェーブが、ご参加いただいた皆様方にとって、デザインの新たな方向性を見出すきっかけになるとともに、デザインの振興、ひいては産業の発展に大きく貢献することを心から期待しています。

富山県知事 石井 隆一

※敬称略

toyama design competition 2015

富山デザインコンペティション2015



テーマ 地域の魅力を伝えるスーベニア

北陸新幹線が開通し、2つの美術館のオープンを控える富山県は「デザインの発信源」として更なる変貌を遂げていきます。今必要なのは、地域の魅力を見直し、時代に適したデザインで再編集すること。自然や産業など特有のリソースを生かし、プロダクト、アート、工芸などジャンルにとらわれず、多くの人の思い出や記憶に残るような「地域で産み、地域に招く」ためのデザインを募集しました。

富山デザインウェブ事業の中核となる「富山デザインコンペティション」は、全国で初めて「商品化」を前提とするコンペとしてスタートし、今回で22回目を迎えました。デザイナー、企業、富山県総合デザインセンターが協同して入賞作品の商品化に取り組み、これまで40点以上の商品が世に送り出され、幾つものヒット商品が生まれました。各方面から注目されるコンペとしてすっかり定着しています。

昨年までは「富山プロダクトデザインコンペティション」という名称で開催されていましたが、今年から、「モノ」だけでなく「コト」の領域にもデザインの範囲を広げていくことを狙い、「プロダクト」の文字を外し、新たなコンセプトでスタートすることになりました。今回のテーマは、「地域の魅力を伝えるスーベニア」。数多くの応募作品の中から、2次審査に残った12作品と審査の様様を紹介します。

〔審査評価基準〕

- 独創性** 斬新で、デザイナーの個性が反映されたものであるか。
- 市場ニーズ** 今の時代に適合し、市場が求めているものであるか。
- 美的価値** 造形として美しいものであるか。
- 商品化の可能性** 製造方法が現実的なものであるか。

〔審査員〕

- 鈴木 マサル** テキスタイルデザイナー／東京造形大学教授
- 鈴野 浩一** 建築家／株式会社トラフ建築設計事務所共同主宰
- 萩原 修** デザインディレクター／明星大学デザイン学部教授



2次審査

授賞式

交流会

SCHEDULE

- 6月1日～7月23日
- 7月27日
- 9月30日
- 10月1日～6日
- 10月1日～

- 応募登録、作品提出 (応募総数226点)**
- 1次審査** 応募された作品シートの中から、1次審査通過作品12点を決定。審査結果は7月28日にウェブサイトにより発表。1次審査通過者には、2次審査で提出してもらう模型の制作支援として5万円を補助。
- 2次審査・授賞式 交流会** 2次審査に進んだ12組のデザイナーによる模型を使ったプレゼンテーションが行われ、コンセプトの伝わりやすさ、アイデアの実現性、商品としての完成度などを審査。質疑応答では、審査員がさまざまな角度からデザイナーに質問や意見を投げかけた。公開審査で各賞を決定し、その後授賞式が行われた。参加したデザイナー、審査員、企業のトップや商品開発担当者と意見交換をする交流会を開催。
- 展示会** 富山デザインウェブ展示会で、2次審査を受けた12作品を展示紹介。
- 商品化支援** 商品化に向けて企業とのコラボレーションや販売開拓を支援。

とやまデザイン賞

hanabatake

富山県の県花であるチューリップの畑をモチーフにした箸を、デザインしました。食卓の上には、箸を連ねることにより、小さなチューリップ畑が出現し、彩りを加えるとともに、あの鮮やかで壮大な光景を、呼び起こすようなモノとなることを目指しました。記念としてだけでなく、日常で使うモノだからこそ、それが記憶を呼び起こす種となり、私たちの生活をより美しく、わくわくさせるものになるのではないのでしょうか。



浅野 皓貴

1993年千葉県生まれ。
2015年千葉工業大学デザイン科卒業。



準とやまデザイン賞



富山日記

今日では若者を中心に写真を撮る習慣が一般化しています。そこでそれを利用し、富山の思い出をより心に残してもらう為のアルバムを考案しました。本来、お土産とは旅行が終わってから楽しむものですが、富山日記は、旅の最中にも楽しめるお土産です。イラストに合わせて写真を撮影して現像し、ページを埋めていきます。最終的に一冊のアルバムとして仕上がると、心に残り、友人にも自慢したくなるでしょう。



小林 知佳

滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科在籍。
グラフィックデザイン、プロダクトデザインを中心に学んでいる。



黒木靖夫特別賞



Kombelope

富山県は全国でも昆布消費量が多く、昆布締めは富山の郷土料理として親しまれています。「kombelope」はkomb=昆布とenvelope=封筒を合わせた言葉で、好きな食べ物を包む事で昆布締めをつくる事ができます。手渡しはもちろん、切手を貼れば郵送もできます。完成しているものではなく、少しだけ手を加えて、昆布の旨味をもらって完成させる昆布の封筒。この封筒を通して地域の魅力を人から人へ伝えられたらと考えています。



馬淵 晃

日本大学海洋建築工学科修士課程修了後、設計事務所を経て2011年AKIRA MABUCHI DESIGNとして独立。
グラフィック、インテリア、日用品の企画、デザイン、ディレクションなどのごとを伝えるために様々な視点をもって活動しています。

1次審査
通過作品

1 富山の箸置き

食卓の主役は食材でありそれを引き立てる器ではありますが、和食の食卓にはかかせないのが箸置き。そんな脇役である箸置きをあらためてデザインしてみました。日本海の波をイメージした波打つ造形美。重ねて置くことで素敵な卓上のオブジェに化身。富山に代表される金属加工や表面処理を施してさまざまな魅力ある質感と富山の食材を表現。富山を訪れるたびに思い出のコレクションとして増やしていける素敵なアイテムになりました。



岡 広樹

日大芸術学部デザイン学科IDコース卒業後、1979年にソニー(株)入社。同デザインセンターにてオーディオ商品からプロ用プロダクトまで数多くのデザインを手がける。2014年にソニー(株)退職後、ものづくりの総合支援企業(株)日南グループに移籍し幅広くデザイン活動を続けている。主な作品:2006年ソニー(株)PCM-D1Gマーク金賞、IF金賞、REDDOT受賞

2 雪道のタオル

富山を訪れ、歩いて感じた音や空気とその風景。その記憶を切り取って持ち帰り、いつでもその風景を思い起こすことができるプロダクトの提案です。雪が降る寒い冬や春山の風景を、タオルの毛足の長さの差を利用して絵柄をつくる「ジャガード織り」で表現します。軽くて持ち歩きやすく、シンプルで主張しすぎないデザインは、ギフトとしても選びやすく、老若男女問わず幅広い人に喜ばれるスーベニアとなることが期待できます。



奈部 遥佳

1985年富山県生まれ。国立大学法人富山大学高岡短期大学部専攻科産業造形専攻卒業。2009年より大阪にてメーカー勤務。全国の伝統工芸やものづくりの産地と関わりながら、メモリアルファニチャーを中心とした商品の企画開発に携わる。

3 「黒箱」および「富山 黒ブランド」の提案

コンセプトは、ブラックボックスな宝宝箱。「富山=黒」のブランドイメージで日本中に知らしめよう。富山の魅力と言っても、これというものがすくには思い浮かばない。ところが、富山について調べていると、「そうこれこれ!あれも富山だったんだ。」といくつも出てくることがに気付く。まるで鉱山に隠れた宝石の如く、発掘すれば富山の魅力が溢れる。富山のたくさんの魅力を、黒部ダム「黒」と魅力が隠されたブラックボックス=宝宝箱として「黒箱」を提案する。本作品を始めとした黒に関するスーベニア・シリーズを提供し、富山といえば「黒」を想起させるようなブランドを確立する。



岡崎 耕太

1989年 埼玉県生まれ。2013年法政大学大学院デザイン工学研究科修了。学生時代より複数のベンチャー及びスタートアップにてデザイナーとして活動。インターネット企業大手での経営戦略業務を経て、外資系コンサルティングファームにてエクスペリエンスデザイン、経営コンサルティングに従事。ビジネスプランコンペ及びデザインコンペにて多数受賞。

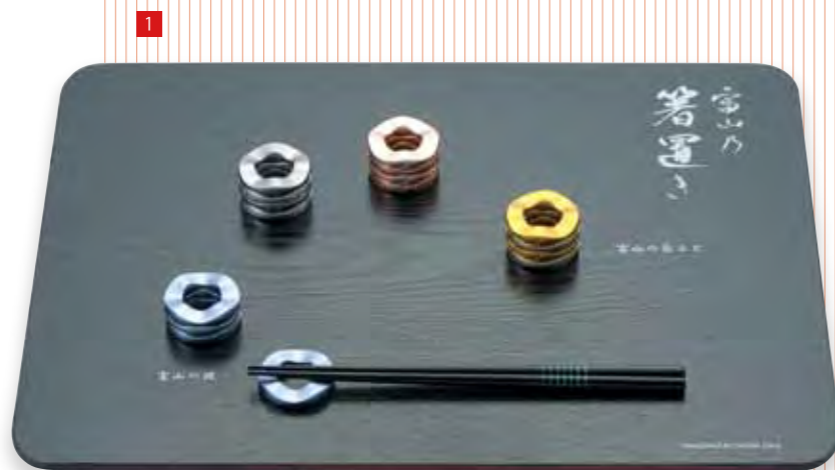
4 Sunny lettuce

このサニーレタスは越中和紙を用いたペーパーナブキンです。越中和紙の吸水性・耐久性に優れた特性を生かし、そこにもみ紙風シワ加工を施して立体感のあるデザインにしました。レタスナブキンのモチーフは、食に関する多目的な用途で、使用してもらえらることでしょ。旅先での食事でも楽しい思い出の一つ。この製品から、素敵な食の演出を感受して頂ければと思います。



イグロデザイン 鈴木 真実

1966年大阪府生まれ。関西女子美術短期大学工芸デザイン科卒業。京都工業試験所、京都府立陶工訓練校修了。家電メーカーデザインアシスタントを経て、フリーランスへ転身。現在、イグロデザイン代表。



5 富山の剣山

錫の「やわらかく変形する」「水を浄化する」「錆びない」といった特性を活かし、花や枝を固定する機能だけではない、新しい剣山のイロとカタチを提案しました。富山県が誇る、立山連峰・富山湾・食文化をモチーフにし、富山の思い出や風景を花瓶やコップに飾ることが出来ます。花を生けていない時でも 空間を彩るアクセントになります。使う人が好きな形に自由に曲げて楽しんでいただき、日常の風景をちよっと刺激する存在になればいいと思います。



小林 恭子

1982年新潟県生まれ。インテリアコーディネーター。2004年日本女子大学家政学部卒業。06年桑沢デザイン研究所デザイン専攻科卒業。都内設計事務所などに勤務後、13年から富山県在住。

6 くだべの薬袋

薬の魅力とは、持っていると安心できるということだ。富山県に古くからある配置薬は、薬の魅力を最大限に引き出していると言える。作品タイトルの「くだべ」とは、かつて富山県の立山に現れたと言われている山の精だ。随筆集「鼠環十種」に、「くだべ」の絵を見た者は病を免れると記されていることから、お守りを象った薬袋に、「くだべ」をイメージしたマークを入れることを思いついた。この薬袋を持っていると、きっと安心できるだろう。



西林 瑞基

1994年富山生まれ。2014年滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科入学。プロダクトデザイン、グラフィックデザインを主に学んでいる。「DESIGN HUMANITY」をコンセプトに、コミュニケーションと人間らしさを追求するデザインを手掛ける。

7 富山の宝氷

刺身や冷菜、冷たい麺類などの料理の添え物として使用できる、シロエビモチーフの製氷皿です。富山土産である海の幸や氷見うどんと抱き合わせ購入や、富山で味わったシロエビの記念として購入することができ、食卓に風情と旅の記憶をお届けします。土産品として購入されるだけに留まらず、旅館や飲食店での使用により、氷のように澄んだシロエビの存在が持続的に拡散され、富山に興味を持ってもらうきっかけを広く提供することに繋がります。



萩原 啓介

1982年神奈川県生まれ。2005年武蔵工業大学工学部機械工学科卒業。オフィス家具メーカーを経て、現在は株式会社カインズに勤務。インハウスデザイナーとしてホームセンターのPB商品の企画・デザインに従事。GOOD DESIGN AWARD 2013、2014、2015受賞。

8 Tulip

富山の県花でもあるチューリップを1つのテーマモチーフとし、それを様々なプロダクトに展開することで、まとまりのある商品群を生み出し地域ブランドの強化を図る。またそこにガラスや金属などの地場産業が関わる仕組みをつくることで、地域と密着したものづくりの関係を築く。今回は、ケース一体型のお香立てと美しい佇まいの砂時計を提案する。



鷺尾 和哉

1982年神戸生まれ。2009年京都工芸繊維大学大学院修了後、富士通デザイン(株)を経て、ヤマハ(株)に勤務。現在、インハウスの傍ら、KAZUYA WASHIO DESIGNとしてフリーランスの活動を行う。受賞歴:14年サンスター文具アイデアコンテストグランプリ他多数受賞

9 YUKINO OTANI

立山黒部アルペンルートの「雪の大谷」に着目し、ティッシュケースにその情景をデザインしました。素材を透明なアクリルにすることで、ティッシュの断面を雪の壁に見立てています。生活の中で使えるスーベニアにすることで、感動を記憶に長くとどめます。また、より多くの人に「雪の大谷」の魅力を発信するツールになると考えました。



大日方 春奈

長野県生まれ。長野美術専門学校研究科1年在籍。

コンペを振り返って

テーマの選定から一般公開の2次審査までを担った3名の審査員と富山県総合デザインセンター所長にコンペティションを振り返り、今年の応募作品や審査について、今後の富山デザインコンペティションに期待することなどを伺いました。

審査員



鈴木 マサル

テキストデザイナー
東京造形大学教授

コンペを振り返って

1次審査で感じた事は「本格的なデザイン提案が色あせて見えてしまう」という事でした。「本格的」とは、応募者のキャリアを感じさせる応募案という意味なのですが、結果として1次の段階ではそういった「本格派」の案をあまり残す事が出来ませんでした。

技術、コンセプト、形態、リサーチ等、デザインには様々な要素が入り組みます。それらのスキルが高くても、それが独りよがりになってしまっている第三者の共感が得られず、デザインの存在意義は薄くなります。そこを見誤っていないかどうか1次審査の評価の分かれ目になったのではないかと思います。

2次の公開プレゼンでは、今回のテーマが「地域の魅力を伝えるスーベニア」という事もあり、富山という地域性を伝える手段として「記憶」というキーワードが多く見受けられました。ここでもやはり、その「記憶」が共感を得られるものになっているかどうかの評価のポイントとなったように思います。

その商品を見ただけで、形態や色を見ただけで、見た事も無い風景が脳裏に浮かぶようなデザインになっているか？そのストーリーを聞いただけでワクワクするような、自分も経験してみたいと思えるような提案になっているか？

上位の入賞作品はパーソナルな記憶から発想されたものであっても、他者の共感を得る説得力を持ったデザインになっていて、富山という地域性も色濃く反映されていたと思います。

関係者の皆様、おつかれさまでした。商品化が実現し、世に出る事を楽しみにしております。

プロフィール

多摩美術大学卒業後、栗辻博デザイン室に勤務。独立後、2005年からファブリックブランドOTTAIPNUを主催。自身のブランド以外にも、10年よりフィンランドの老舗ブランドであるマリメッコや、ラブアンカンクリ、ムーミントリビュートワークスなど多くのブランドからテキストスタイルを発表。テキストスタイル以外にも国内外の様々なメーカー、ブランドのプロジェクトに参画し、14年には北日本新聞の紙面を柄でラッピングする企画「富山もよう」をデザインする。



鈴木 浩一

建築家
株式会社トラフ建築設計事務所共同主宰

コンペを振り返って

今年から富山プロダクトデザインコンペのプロダクトがとれました。そのためあつてかプロダクトそのものより、ソフト的な提案、モノからコトへの提案も多く見受けられました。

それによって提案はおもしろいけれど、モノのデザインとしての完成度は低いのでは？でも今回から「プロダクト」が消えたのでモノのデザイン自体よりコトを提案しているような着眼点のおもしろさに注目した方がいいのでは？いやいやでも待てよ、今年のテーマは「スーベニア」だからショップで売れる商品としての完成度が高い物の方がよいのではないかと…。

皆さんに見られながらの公開審査の中、なかなか自分でも決めきれず最後まで審査しながら本当に悩みました。「準とやまデザイン賞」の「富山日記」や「黒木靖夫特別賞」の「Kombelope」はモノそのものの魅力というよりはコトとしての提案として選ばれました。

「とやまデザイン賞」の「hanabatake」も含めこの3つは、個人的な経験や記憶から発想された話をプレゼンでされていて記憶に残り、そこが入賞になった差でもあったかなと感じました。

公開審査に来てくれたけど、惜しくも賞に入らなかった人は、何かしらのアイデアの種がそこにはあり、たくさんの応募の中から選ばれてますので、引き続き考えてもらいたい商品につながってほしいと思います。

商品として実際見ることを楽しみにしています。

プロフィール

2004年に禿真哉(かむろ しんや)とトラフ建築設計事務所設立。建築の設計をはじめ、ショップのインテリアデザイン、展示会の会場構成、プロダクトデザイン、空間インスタレーションやムービー制作への参加など多岐に渡り、建築的な思考をベースに取り組んでいる。主な作品に「テンプレート イン クラスカ」「NIKE 1LOVE」「港北の住宅」「空気の器」「ガリバーテーブル」など。「光の織機(Canon Milano Salone 2011)」は、会期中の最も優れた展示としてエリートデザインアワード最優秀賞に選ばれた。11年「空気の器の本」、作品集「TORAFU ARCHITECTS 2004-2011 トラフ建築設計事務所のアイデアとプロセス」(ともに美術出版社)、12年絵本「トラフの小さな都市計画」(平凡社)を刊行。



萩原 修

デザインディレクター
明星大学デザイン学部教授

地域を感じるためのデザイン

地域や暮らしを良くするためのデザインが必要とされる時代になりました。それにともない、グラフィックやプロダクト、インテリア、建築などそれぞれの分野のデザインを融合する必要性が増えています。

そんな時代の流れを象徴するように、今回のコンペから「プロダクト」の文字が消えました。アートや工芸までも視野にいれながら、ジャンルを越えたデザインを提案することが求められました。

テーマは「地域の魅力を伝えるスーベニア」であり、モノだけでなく、それをどうやって伝えていくのかのコミュニケーションのあり方が問われることになりました。

これまでと同様に、商品化を前提としたコンペであり、製品として実現するまでの過程と、つくったものを、どこで、誰に、いくらで、どうやって売っていくのかも審査の中で議論になりました。造形的な美しさや機能性、合理性はもちろんのこと、ブランドづくりや流通のしくみ、ビジネスモデルまで含めた提案もあり、審査員は、多方面から検討していくことを強いられたい審査だったと思います。

それでも、最終の2次審査で、応募者から直接話を聞くことで、その想いや本気度が伝わったものが選ばれたと思います。理屈を越えたところで、人の感覚や感情に訴えることこそデザインの力なのだと思わされました。

今後、商品化を進めていくにあたっては、関係者との話し合いを重ねながら、より現実的なモノにしていく必要があります。審査は、ひとつの通過点であり、商品化され、店頭に並び、それが販売され、多くの人に届き、それによって、「地域を感じることができる」その道のりは、まだまだ、続いていくでしょう。今後のみなさんの実践を楽しみにしています。

プロフィール

1961年生まれ。国分寺市育ち。三鷹市在住。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。大日本印刷、リビングデザインセンターOZONEを経て独立。日用品、住宅、店、展示会、書籍などの企画、編集、プロデュースを手がける。「つくし文具店」「コド・モノ・コト」「かみの工作所」「中央線デザインネットワーク」「国立本店」「西荻紙店」「国分寺さんち」「東京にしがわ大学」などのプロジェクトを推進。著書に「9坪の家」「デザインスタンス」など。株式会社シュウヘンカ代表。



大矢 寿雄

富山県総合デザインセンター
所長

デザインコンペを振り返って

今年で22回目を迎えた「富山デザインコンペティション」。プロダクトという名称を外し、コンペの捉え方を広げたことによって、モノだけの時代からコト、持続的な関係性、さらにコミュニティの構築などまでがデザインの領域に入ってきた感がある。結果的にそれぞれ富山県の自然や産業など地域特有のリソースを生かした作品が選ばれた。

とやまデザイン賞<hanabatake>は富山の観光地、砺波平野のチューリップ畑を連想させる。塗り分けられたカラフルな色と土のような木の素材がチューリップ畑と重なり見た目も美しく、五角形の形状が箸として使い易く「記憶や思い出を持って帰る」という今回のテーマにもよく合致していて完成度も高い。

準とやまデザイン賞<富山日記>は地域の特徴を掴み、モノよりコト・人・場所に着目し、いろいろなものが繋がっていくという方向性が面白い。富山県にはいろいろな要素があり、それをバランス良く選んでいると思う。グラフィックの使い方やコピーも秀逸であり、旅の思い出として富山県の姿が見えてくる作品となっている。

黒木靖夫特別賞<Kombelope>は昆布を封筒に見立て、郵便物で送られてくるという発想が面白い。昆布締めを作ったことのない人がこれを受け取ってやってみようと思わせる提案であり、富山県の食文化である「昆布締め」を広めていこうというコンセプト・アイデアはとてもユニークである。

今回の入賞作品以外にも捨てがたい作品もあり、さらにブラッシュアップすることで、世の中に生まれてくることを期待したい。

テーマ

直径 60mm の 道具

期間 / 2015年9月4日(金)~6日(日)
会場 / ガラス: 富山ガラス工房
メタル: 高岡市デザイン・工芸センター



全国で活躍するデザイナーたちが、
富山素材であるガラスとメタルを使い、職人たちの
サポートを受けながら作品を制作する「マテリアルワークショップ」。

今年のテーマは「直径60mmの道具」。7組のクリエイターが富山素材の可能性に挑みました。

近年では、デザインコンペだけでなく、このワークショップで制作された作品が商品化されるケースも増えています。



Glass ガラス造型

1994年、富山ガラス工房が設立されてから20年あまり。工房からは数多くのガラス作家が誕生し、ガラスも富山を代表する素材としてすっかり定着してきました。作品づくりにチャレンジした4組のデザイナーたちは、富山ガラス工房のスタッフたちのサポートを受けながら、それぞれのアイデアの具現化に取り組んでいました。

Metal メタル造型

地場産業として長い歴史を持つ高岡銅器。今日ではその鋳物技術は、銅だけでなく錫やアルミ、真鍮などを使ったモダンな作品づくりにも活かされています。3組のデザイナーは、鋳造による造型に加え、研磨やブラストなど表面加工も施すことで、金属という素材の魅力を引き出すものづくりに力を注ぎました。

「素材」や「工法」はデザインに大きな影響を与えますが、「寸法」もまた重要な意味を持つ要素です。

これまではフリーな条件で制作してもらっていましたが、今回のワークショップでは、富山素材に加え「直径60mm」という条件を設定しました。この制約が、参加した皆さんの創造(想像)力をかき立てる方向にうまく作用したのではないかと考えています。

参加者の皆さんは、それぞれのこだわりと自分なりの明確なコンセプトをもってデザインをされていました。「群での表現」など、60mmという小さな作品ならではの面白さも見ることができました。

3日間という時間の中で、クリエイティビティをどれだけ広げられるかがこのワークショップのテーマ。この機会に得たものをこれからのデザイン活動の中で活かしていけるよう願っています。

近藤 康夫

デザイナー / 近藤康夫デザイン事務所





CM3



カップ同士が逆さまに接し合うメジャーカップです。実用性の追求から一旦離れてみて、ものとしての金属の魅力を引き出してこのようなアイコン的なものが成り立つということも充分考えられるのではないかと考えました。製法・サイズ・工程に限られた中、ワークショップならではの実験的なフォルムと機能を探し出した一つの回答。仕上げや容量に応じてパリエーション展開も念頭に置いたデザインです。



小関 隆一 Ryu Kozeki

東京都出身。多摩美術大学卒業後IDKデザイン研究所に勤務、喜多俊之氏に師事。2011年にRKDS設立。製品作りからブランド展開に至るデザイン/アートディレクション/クリエイティブディレクションを行い、プロジェクトの本質的な魅力をシンプルに導き出し可能性を築く活動に取り組む。iFデザイン賞、グッドデザイン賞特別賞など受賞。

講評/ 飾込んでカタチになった時、独自の存在感を放っていた。目の付け所も面白い。計量という作業が楽しくなる道具となった。

一口皿



旬の食材を一口味わう為の最小単位の器。薄く繊細に伸びた口が美しく、鋳物の重厚感が高級感を演出する。様々な角度を持つ辺は細胞のように繋がり、食器以外にもジュエリートレイとしても使用することができます。富山県の金属製造と研磨技術を組み合わせて様々な表情を生み出す事ができる器です。



吉田 真也 Shinya Yoshida

1984年生まれ。元自動車のメカニック。その後専門学校でデザインを学び、2012年「SHINYA YOSHIDA DESIGN」としてデザイン活動を開始。同年より日本工学院専門学校プロダクトデザイン科非常勤講師。グッドデザイン賞、iFデザイン賞 受賞など。プロダクトデザインを中心に、デザインサポート、CG制作などの業務も行う。

講評/ 「直径60mm」というサイズの面白さを形にできた作品だと思う。また複数の皿の集合(群)で表現しているところも、この作品の魅力となっている。

BAR/STUDIO



BAR/居酒屋で見かける定番のボトルオープナーをもとに、より簡単な力で王冠を外すことができるように大きさや厚みを微調整しています。STUDIO/書斎の机上にあるような一般的なペーパーナイフをもとに、華やかな装飾を省いています。歴史の中で多くの人に認知された形状をやみくもに変えることはせず、アイコン化されたそれぞれのイメージを尊重しデザインしました。



小山 崇 Takashi Koyama

1984年埼玉県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。インハウスデザイナーとして仕事をしながら活動しています。

講評/ ストイックな作品。作者の力量が試される形とデザインである。作品からは並々ならぬ作者の力量が伺える。ぜひこれからもこの路線を貫いてほしいと思う。

Lotus scape



何かを見た時、そのモノとは違うことを想像する人の能力に注目しました。Lotus scapeはテーブル上の食器が不意に蓮の池とリンクする瞬間を切り取った情景です。現実と想像の間の曖昧な情景を単体としてではなく空間として表現する事で、60mmの葉で富山での記憶を持ち帰ってもらえることを目指しました。この作品を通して、富山の吹きガラスの自然な曲面と細やかな仕上げの美しさを感じていただけると幸いです。



ヨナンペ yonanp

2人のデザイナーによるデザインユニットyonanp/ヨナンペ。金沢美術工芸大学を卒業後、2013年より活動。富山プロダクトデザインコンペティション2014とやまデザイン賞、MUSABI Product Design Competition2013・2014入賞、ASIA AWARDS ヤングクリエイター展 ファイナリスト。

講評/ 「モノの背景にある記憶やイメージも具現化する」というコンセプトが斬新だった。デザインがモノだけにとどまるものではないことを示唆する作品となった。

水を感じる酒器/変化する花器



水を感じる酒器/上の器から下の器へ、気泡が入った透明ガラスが流動的に流れ落ちる様子を表現することで、水の流れる感じてもらえればと思い、提案しました。変化する花器/室内で育てるミニプランツのための花器です。2つの器を組み合わせることで、土と水が必要な植物の鉢植えになり、上の器を逆さに置くことで一輪挿しになります。下の器のみでも使用可能です。そのように多種多様な育て方ができる花器をデザインしました。



嶋津 有香 Yuka Shimazu

1993年滋賀県生まれ。2012年滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科入学。富山プロダクトデザインコンペティション2014準とやまデザイン賞受賞。

講評/ 今の時代の生活感に合った、商品化に十分耐えうる作品であると思う。酒器には「水」の持つ流動性がよく表現されている。

sou



souは小さなガラス器。富山ガラス工房には豊富な色のガラスがあります。その繊細な色のトーンと吹きガラスの柔らかさを生かす器を目指しました。2層の境目のゆらいだ線が、手吹きガラスならではの優しさを出しています。程よい高さや深さがあり、料理やソース、塩などを入れてテーブルコーディネートすることで、いつもの食卓が特別な風景に変わります。食器以外にもアクセサリー入れなど様々な用途にお使い頂けます。



辰野 しずか Shizuka Tatsuno

1983年生まれ。英国のキングストン大学プロダクト&家具科を首席で卒業後、デザイン事務所を経て、2011年「+st」を設立。家具、生活用品、ファッション小物のデザインを中心に、企画からディレクション、付随するグラフィックデザインなど様々な業務を手掛ける。日本大学芸術学部デザイン学科非常勤講師。

講評/ 量産段階での効率性や、食卓での使用シーンなどを考慮しながら、考え抜かれ、計算しつくされた作品である。食器や小物入れなど、様々な使い方ができるのも魅力。

casting



慌ただしい日常において、ガラスは軽さや透明度を求められ、その存在を消すかのように扱われています。内容物を閉じ込めるように歪んだ形状、すべての光を無視する深い黒。何を入れてもガラスが主役になる宙吹き容器です。



宮田 孝典 Takanori Miyada

1982年 石川県生まれ。静岡大学、大学院を卒業。2007年 DESIGN STUDIO S に入社。2012年 石川県金沢市でESOLA FACTORY設立。

講評/ 「なんだろうこれ?」と見る者の頭を刺激してくれる作品になった。ガラス素材の特性を活かした奥行き感も、この作品の魅力である。

デザインウェーブ商品化プロジェクト

富山デザインウェーブ事業を通して、これまでに40点を超える作品が商品化され、いくつものヒット商品が生まれています。新しく商品化された作品と、商品化に向けて開発中の作品をご紹介します。



富山プロダクトデザインコンペティション2014 「準とやまデザイン賞」受賞作品

富山飴【とやまあめ】

デザイナー／嶋津有香(滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科在籍)
製造販売／(株)広貫堂(富山県富山市) 価格／500円(税抜)

「富山飴」は、「富山プロダクトデザインコンペティション2014」で準とやまデザイン賞を獲得した嶋津有香さんの作品。「食べるガイドブック」をコンセプトにパッケージに富山の物語や情報をデザインしたもの。富山のお土産や旅行のお供として購入してもらおうというのが狙い。この作品にほれ込んだ広貫堂が、嶋津さん、コピーライター・タダカツさん、富山県総合デザインセンターと共同で商品化にこぎつけました。

「富山飴」の個包装には、「とやま弁で『こんにちには』は『まいどはや』」、「とやまの菓の始まりは『江戸城腹痛事件』にあり」といった富山県と富山の菓を題材とした物語やウンチク情報などがカラフルに印刷されており、その数は80種類にのぼります。

広貫堂は、「くすりの富山県」を代表する医薬品・医薬部外品メーカーのひとつ。「富山飴」は同社直営店で販売されており、購入客からは「可愛い」「面白い」と好評。「商品開発における

デザインの大切さを再発見するいい機会となった」と同社企画開発担当・奥田恵美さんは語ります。

広貫堂では富山飴に続く嶋津さんとの共同プロジェクト第2弾として「菓膳カレー」の新バージョン開発にも着手。2015年12月に女性向けの「生姜カレー」「根菜カレー」の2種類を発売しました。



商品化のポイント

中のカラフルな個包装が見えそうで見えない。「何が入っているのだろう?」という期待感を演出する—そんな大袋の透明度の調整に苦労しました。

80種類にのぼる物語の企画は、地元のコピーライター、嶋津さん、広貫堂スタッフの共同作業で。集まった情報をもとに、嶋津さんがひとつひとつデザインしました。



富山マテリアルワークショップ2015 提案作品

SOU【そう】

デザイナー／辰野しずか(+st デザイナー)
製造／富山ガラス工房(富山県富山市) 価格／未定

「sou」は、「富山マテリアルワークショップ2015」※に参加した、辰野しずかさん(東京都在住)の作品。富山ガラス工房とのコラボレーションのもと製作された手作りの小さな吹きガラス器です。同工房のガラスの繊細なカラー表現と、吹きガラスの柔らかさを活かそうとデザインされた作品です。

「sou」とは「層」のこと。色ガラスと透明ガラス、その2層の境目にある、手吹きガラスならではの優しいグラデーション。ガラスを重ね合わせたときの層をなす光の美しさを、ワークショップのテーマ「直径60mm」の器の中に閉じ込めました。

ほど良い高さや深さがあり、料理やソース、塩など調味料を入れる器としてテーブルコーディネートすれば、食卓が特別な風景に変わります。食器以外にもアクセサリー入れなど様々な用途に使えます。

2015年12月には、東京で開催された「IFFT/インテリア ライフスタイル リビング」にプロトタイプ



プを出展。特徴的な柔らかな形状と、5色のガラスの微妙なグラデーションの美しさが、バイヤーなどから高い評価を受けました。

現在、富山ガラス工房と富山県総合デザインセンターの協力のもと、商品化に向けての調整作業が進められています。

※ワークショップについてはP15を参照。

商品化のポイント

ワークショップでは、課題の「直径60mm」で製作された「sou」。しかし商品化に向けての試行錯誤の末にたどり着いたのが「直径70mm」というサイズ。わずか10mmの違いで、形状の作り込みや、最大の特徴である微妙な色の表現が一気に向上しました。テーブルの上での「特別感」をかもし出すために、こだわったのは「高さ」。低いと存在感が消え、高すぎると圧迫感を与える。いくつもの高さの試作品を製作、お皿やフォークと一緒にテーブル上に並べ、ベストの高さを割り出しました。

exhibition



富山もよう 空気の器

「空気の器」は萩原氏が携わった印刷・紙工会社(東京・立川市)の工場再生プロジェクトから生まれた。萩原氏の呼びかけに応える形で2009年に鈴木氏がデザインした「空気の器」は、その後さまざまなアーティストとのコラボレーションによって、多彩な作品が生み出されてきた。今回、富山デザインコンペティションの審査員となったことを機に、鈴木氏の「富山もよう」の図柄でコラボすることになった「富山もよう 空気の器」は、鈴木・鈴木・萩原三氏の共同作品である。

富山デザインウエーブ2015 企画展

クロスオーバー 地域が幸せになるデザイン・人が喜ぶスーベニア展

期間: 2015年10月1日(木)~10月6日(火) / 会場: ウイング・ウイング高岡

富山デザインコンペティション2015の審査員を務める、鈴木マサル氏、鈴木浩一氏、萩原修氏の作品を紹介する展示会。三人が手がけるデザインプロジェクトの中から、単なるモノのデザインにとどまらず、商品づくりや地域復興などの街づくり、多くの人びとを巻き込むムーブメントなどへと展開していく領域を越えるプロジェクト、地域に根ざしたプロジェクトを展示・紹介しました。

message デザインのそもそもの役割は、さまざまな問題を解決し、より良い状況を生み出す事です。

領域に縛られず、アイデアにしがらみがない状態でシンプルに「物事を良くする」事を考えて作られたデザインは、軽やかで、今の時代に必要とされているキラキラとした空気感をまもって生まれてくるのではないのでしょうか。

地域のためのデザインとは、一過性ではなく、先々の変化や役割まで考えられた継続性のあるものが望ましいと思います。それらはもしかしたらデザインというよりも、行動やムーブメントのような人の動きを伴うもので、そうしたものが状況を少しずつ変えていくくれるのかもしれない。

そういう大きなものに比べるとデザインは、実にちっぽけなものであるのですが、そういった事を起こすきっかけになるものをデザインは作ることが出来ると、私は信じています。

Masaru SUZUKI 鈴木 マサル

message 領域を超えることで生まれるデザインの可能性は、その領域の中の常識的なことを知らないということが強みになることもあります。また依頼する側にも、新しいものを生み出したいからこそ、違う領域のデザイナーに頼むのだと思います。そういう状況の中で、領域の常識に縛られることのない発想が、相乗効果として生み出される可能性があると思います。

デザインがその物を売ることを目的にしているのではなく、たとえば石巻工房であれば、すべてDIYで簡単に作れる家具であり、職を失った人や若者が働ける場をつくることを目的にしています。そのような地域のためのデザインは、多くの人を巻き込んでいく力のあるプロジェクトになると思います。AA STOOLをデザインしながらも、それを作る人の働く場をイメージし、石巻に石巻工房があることが、地域の財産になるよう育てることが出来たらと活動しています。このような「小さな都市計画」が、さまざまところで行なわれれば、都市はいきいきと魅力的になると思います。

Kouichi SUZUNO 鈴木 浩一

message 戦後70年、これまでのデザインは、産業や商業のために役立つデザインが中心になり、それぞれの業界や分野ごとに発展してきました。ところがバブルがはじけ、経済発展が停滞し、人口が減少に転じる状況で、人々はもう一度自分たちの足元を見つめ直し、よりよい暮らしのために必要なデザインとは何かを考えるようになります。

ものをつくって売る立場からではなく、ものを使い暮らす立場からデザインを見れば、領域にとらわれないことは当然であり、デザインの専門分野の領域をこえるだけでなく、建築はもちろん、工芸やアートといったジャンルまで視野にいれ、まちづくり、観光、教育、医療などと連携し、越境しながら、古くて新しい人間的な暮らしの感覚を取り戻す時期に来ています。

デザインは、地域の埋もれた資源を可視化し、多くの人にわかりやすく美しく伝えていくこと、そして、必要に応じて、地域の資源を活用したより良い商品やサービスを生み出し、必要な人に届けることを促進することが出来る技術。その地域に住み、その地域を愛し、その地域の人とともに活動していくデザイナーが増えていくことに期待したいと思います。

Shu HAGIWARA 萩原 修

北日本新聞(富山県)創刊130周年の特別企画として展開された「富山もよう」。そのプロジェクトをパネルで紹介するとともに、鈴木氏がデザインした図柄を用いて商品化したエコバッグや玄関マットなどが展示された。



鈴木氏のオリジナルブランド「OTTAIPNU(オッタイピヌ)」から発表されている傘のコレクションも展示された。



東日本大震災後スタートした「石巻工房」では、デッキ材を用いて専門職でなくても作れる家具のデザインを提案。産業おこし・街づくりへと発展していくプロジェクトだ。



化粧版メーカー(株)伊千呂(高山市)との間で行われた「イチロのイーロ」プロジェクト。そこで生まれた「ドールチェアハウス」「コロロデスク」「コロロスツール」など一連の作品は、「生活の道具」として家具の概念を根本的に変える提案となった。



仏具メーカー(株)本保(高岡市)との間で始まった「仏具のデザイン研究所」は、新たな仏具の開発にとどまらず、現代にとつての「祈り」や「悼み」のあり方を考え提案するプロジェクトでもある。



地域に住み活動するデザイン関係者の交流をはかる「中央線デザインネットワーク」による、閉店していた文具店を拠点に新たな文具の製品化やデザイン教室、展覧会などを展開する「つくし文具店」は、デザインの力を街づくりに生かしていくひとつの試みとなっている。

デザイン
セミナー

ジャンルの境界を 意識させないデザイン

プロダクト、工芸、アート、建築—
さまざまなジャンルで活躍し、
富山デザインコンペティション2015審査員である3人に、
変化しつづけるデザインの領域についてお話をいただきました。

日時 ■ 2015年10月2日(金) 19:30~21:30
会場 ■ D&DEPARTMENT TOYAMA(富山県民会館1F)



鈴木
マサル

鈴木
浩一

萩原
修

D&DEPARTMENT TOYAMA

「富山もよう」で感じた「富山愛」

桐山 これだけのメンバーが一堂に揃うことは、デザインウ
ェーブといったイベントの機会でもなければなかなか難しい
と思います。3人には、「富山デザインコンペティション2015」
の審査をはじめ、「富山の建築デザインツアー」で県内各所を
まわってもらうなど、あらためて富山県とふれあう機会を持っ
ていただきました。鈴木さんは2014年、「富山もよう」にデザ
イナーとして関わられました。あのプロジェクトは大きな話題
を呼びましたね。

鈴木 お話があつて引き受けたのですが、実は当初、「実現
するのは難しいかもしれない」と思っていました。けれど
もいろいろな人を巻き込み、関わってもらうことで実現して
いった。デザインは確かに僕
が担当したんですけれども、
多くの人の力によってひとつ
のムーブメントのように発展し
ていったプロジェクトだと思
います。

桐山 「富山もよう」のことを
少し説明してください。

鈴木 地元の新聞社が創刊130周年を迎えることになり、そ
れを記念して4日間にわたり新聞紙面を、富山県を表現する柄
でデザインしたのです。この企画は大きな話題を呼びました。
その後、これらのデザインを活かして、富山の会社がバッグや
フロアマットなどの日用品を作ったり、商業施設をデコレー
ションしたり…とさまざまに広がっていった、そのようなプロ
ジェクトです。

桐山 鈴木さんの思いをキャッチする地元の人々がいらっ
しゃった、ということですね。

鈴木 ボランティアで手伝っ
て下さる人もたくさんいて。本
当にありがたいことでした。そ
の後も、このデザインをいろん



モデレーター 桐山登士樹



「富山もよう」傘

なプロダクトに展開していこうという動きが県内の企業を中
心に動いているようですね。

桐山 鈴木さんの目には、富山県人はどのように映っていま
すか？

鈴木 みなさん「富山愛」がとてもすごい。デザインの素材を
探すために県内をあちこちリサーチしたのですが、「ここもい
いが、こっちも見てくれ。まだこんなものもあるぞ」と、ほうほう
引っぱりまわされました(笑)

桐山 デザインでのこだわりはどこどころでしたか？

鈴木 「外」に向かって富山を
PRするというよりも、富山に
いる人たちに喜んでもらえる、
住んでいる土地の魅力を再発
見してもらえる、そのような表
現にしたいと思っていました。

桐山 そもそも富山との出会
いは「傘展」だったんですね？

鈴木 はい。2014年の梅雨時
に富山の市民プラザで、私が
デザインしたテキスタイルをつ
かった傘の展示・販売、トーク



北日本新聞 創刊130周年「富山もようプロジェクト」

ライブなどを行なうイベントを開催しました。聞くところによ
ると富山は「弁当忘れても傘忘れるな」といわれるほど雨の多い
土地柄らしく、そういうご縁もあったのかなと思っています。

桐山 この傘のデザインにはどんな思いが込められていま
すか？

鈴木 やはり雨の日は出かけたくないし、雨がウレシイとい
う人も少ない。鬱々とした気持ちにもなる。だから少しでも気持
ちが前向きになるような、そういうものを作りたいなと。「あの
傘をさして行こうか」と。色は人の気持ちに大きな影響を与え
ますからね。



「富山もよう」エコバッグ

コミュニケーションの場としての店

桐山 萩原さんは「つくし文具店」という試みをやっていますね。

萩原 東京の国立に実家があって、その片隅で母親が文具店をやっていました。学校の前にある普通の文具店で、90年に一度閉店。しばらく休んでいたんですけど、僕が会社を辞めた10年前に再オープンして今に至ります。3坪しかない店で、そこでオリジナル文具を売っています。こつこつ商品化して、今では10点ほどになりました。

桐山 かつては近所に必ずあった文具店や本屋さん、最近ではどんどん店をたたんでいますね。ビジネススペースで考えたとき、こういう店を維持していくのはとても大変な時代になっているのに、すごいなと思っているのですが。

萩原 文具業界の業界紙も「今どきなせこんな店をやるのか？」と取材に来たこともあります(笑)。近くに商店街も何もない住宅地の中にぽつんとある小さな店なので、客もほとんど来ない。採算を考えると合わないのですが、自宅なので家賃も光熱費もほぼ不要。だからやって行けてるところもあります。

桐山 店の運営はどのようにしているのですか？

萩原 毎日開けており、やりたい人が店番をやる「日直制」で運営しています。「居てくれるだけでいい」と募集したら、けっこう来てくれて。私も含めて、そういう人たちが日替わりで店の番をしています。ひとつこだわっていることがあって、それは最近のコンビニでもスーパーでもお店の人と会話をしませんよね。黙ってレジで商品とお金のやり取りをする。母が店をやめたのは、そういうことが嫌だったからです。そんな店にならないようにするぞ、という決意があります。

桐山 今は「言葉の要らないお店」が増えています。

萩原 日直の人も来てくれたお客さんとコミュニケーションが取れる、そんな店にしたいと思っています。まあ、3坪という狭さですから会話せざるを得ない(笑)。それがいいな、と。

桐山 最近の社会は人と人の媒介となるものが無くなってきてますよね。そういう時代だからこそ、つくし文具店のような場が大事なんだと、つくづく思います。



つくし文具店・文具

「祈り」や「心」の領域にも広がるデザイン

桐山 富山県と関係している仕事として「仏具のデザイン研究所」というユニークなプロジェクトをやっておられますね。

萩原 3年間の研究・準備期間を経て2014年から本格始動したプロジェクトです。友人を介して知り合った仏具メーカー(高岡市)の社長と、お酒を飲みながら宗教観や仏具感を話し合うことから始まり、お互いに納得し合ったので「じゃあそろそろ…」という感じでスタートしました。

桐山 萩原さんはとにかくよく話しをされますよね(笑)。

萩原 今日ここに来ておられる鈴野浩一さんをはじめとする4人のデザイナーと一緒に進めていきました。コンセプトは「今の時代に必要とされる仏具を作る」というもの。これまでの仏具のイメージにとらわれることなく、今日的なライフスタイルに融合したデザインの仏具を目指しました。2014年6月には「国際見本市インテリアライフスタイル(東京)」に出展。10月にはリビングデザインセンターOZONEで「暮らしによりそう祈りのかたち展」を開き、これからの住まいにおける祈りの場のあり方の提案を行いました。この1年で身近な人を立て続けに3人見送ったのですが、その体験を経て「仏具ってどういう時に必要とされるものなのか」が、やっと実感として分かるようになってきた。これからは仏具のデザインにとどまらず、人が亡くなったときにどうするかという「祈りのしくみ」も考えていきたいと思っています。

桐山 お話を聞いていて、心の問題、気持ちの分野にもデザインの領域が広がりがつつあるのだなと感じました。



てつ 仏器/高杯/りん

ちいさな仏壇 八具足/ステージ

工場再生を目指し生まれた「空気の器」

桐山 萩原さんと一緒にいくつかのプロジェクトをやったくれた鈴野さん。その代表作と言えば「空気の器」ですね。

鈴野 2009年の作品で、萩原さんのプロデュースで制作したものです。トラフ建築設計事務所がデザインを手掛け、「かみの工作所」が商品化したプロダクトで、国内だけでなくアメリカ・ヨーロッパなど20カ国以上で販売されています。

桐山 モントリオール美術館で永久コレクションに認定されましたね。

鈴野 はい。そもそも空気の器は、東京の立川にある小さな印刷・紙工会社を再生していくプロジェクトから生まれました。今では漫画家の井上雄彦さんをはじめたくさんの方とのコラボ作品を商品化するなど、多くの人を巻き込みながら広がっていきつつあります。さまざまところからの問い合わせも増え、可能性の広がりを実感しています。

桐山 そして、今回は鈴木マサルさんとのコラボが実現した。

鈴野 今回のデザインコンペが機縁となって、鈴木さんの「富山もよう」のことを知りました。「富山のスーベニアを」というオーダーを受け、新しいコラボレーションとして「空気の器・富山もよう」バージョンを制作しました。

桐山 富山もようの新作も計画されているようですから、どんどん新しいバージョンが生まれてくればいいですね。

モノからコトへ領域を超えるデザイン

鈴野 審査員としてデザインコンペを見させていただいたが、モックアップでプレゼンテーションし商品化まで実現しようとするコンペは全国的にもユニークですね。こういうコンペが22年間も続けられているところにすごさを感じます。ところで今年からコンペの名称が変わったんですね。

桐山 はい。昨年までは「富山プロダクトデザインコンペティション」だったのですが、今年から「プロダクト」の文字が無くなりました。

鈴野 その意味はとても大きいと思います。桐山さんも「モノからコトのデザインへ」とおっしゃっていますが、モノの領域に



空気の器



コロロデスク・コロロスツール

とどまらないデザインの志向は、これからの時代とても大切だと思うからです。僕が携わった「石巻工房プロジェクト」もそんな試みの一つです。石巻工房は震災後、地元の人々の自立運営する「DIYメーカー」として、地域活性化の起爆剤になることを目指して設立されました。僕はそこにスツールのデザインを提供したのですが、それはスツールというモノを作ると同時に、職を失った人がそこで働ける工房という場所を作ることを目指すものでした。モノを作り、場所を作り、そこで働く人を作り、最終的には街の活性化を作る。小さなモノのデザインから始まって、街づくりまで広がっていく、そんな動きが生まれようとしています。

萩原 街づくりとモノづくりのデザインが、どう繋がっていくのかに興味があります。これまでは街づくり系のデザイナーとモノづくり系のデザイナーが分かれていたのですが、それを両方見ていかなければならない時代を迎えたのではないかと思います。その意味で「かみの工作所」も、デザインを通じて小さな会社を元気にし、そんなユニークな会社がある地域の豊かさに結びついていけば、と。鈴木さんの富山もようも、それを形にしていくプロセスで人と人との繋がりを生み出し街づくりにも発展していく。そういう仕組みをデザインしていくことの大切さを、今回コンペの審査をしていて感じました。

鈴木 今回のコンペでも、モノとしてのデザインの良否だけでなく、何らかの「行動を誘発する」デザイン、「コトを起こさせる」デザインに注目していました。富山もようも、柄というデザインされたモノを使ってみんなが色々作り始めたところに、面白さがあった。新聞紙を使ってランチョンマットを作ったりワークショップをやったり…人がどんどん動いていった。デザインはちっぽけなものかもしれませんが、こうしたムーブメントを起こすきっかけとなるものを作ることができるものであるとも言えるでしょう。

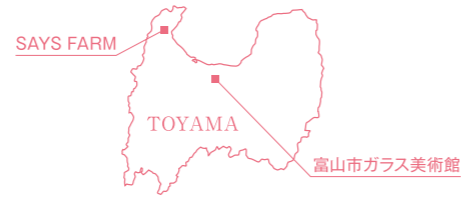
桐山 デザインコンペティションを始めて22年、富山のデザインは着実に成長・成熟してきたように思います。モノのデザインからコトのデザインへ—富山県のデザインのフェーズも第2幕目に入ったように思います。

AAスツール

富山の建築デザインツアー

日時:2015年10月2日(金)／見学先:SAYS FARM 富山市ガラス美術館 (TOYAMAキラリ)

- SCHEDULE**
- 11:30 高岡出発
 - 12:30 SAYS FARM到着／ゲストハウス等を見学
 - 13:00 ワイナリー見学
 - 13:30 レストランにて昼食
 - 15:00 SAYS FARM出発
 - 16:00 富山市ガラス美術館見学
 - 17:00 解散



SAYS FARM

氷見市余川北山238 TEL.0766-72-8288



氷見市の郊外、海を見おろす小高い丘の中腹に建つ、レストラン、カフェ、ギャラリー・ショップを併設したドメヌ※SAYS FARM(セイズファーム)。2014年秋には、新たにゲストハウス(宿泊施設)もオープンしました。江戸時代から続く地元の鮮魚中卸「釣屋」のオーナーが、荒れ放題だった雑木林を開墾しぶどうを栽培。「北陸でワインは作れない」という常識に挑戦し、苦勞のすえ現在ではシャルドネ、メルローなど年間約1万6千本を出荷しています。絶好のロケーションと、新鮮な海の幸が味わえるワイナリー／レストランの魅力に、ファンが着々と増えています。

※ドメヌとは、自分の畑でぶどうを生産し、栽培・醸造・瓶詰を一貫して行うワイン生産者のこと。



鈴野 「北陸でワインは作れない、売れない」—その不可能に粘り強く挑んでいったオーナーの思いから生まれた施設。設計事務所「五割一分(ごわりいちぶ)」の主張しすぎないデザインと、レストラン、ワイナリー、ゲストハウス…そのトータルなプランディングに感心した。

桐山 海の幸をはじめとする恵まれた富山の食材。「食」に彩りを添えるワインと、それらをゆったりと楽しめる、富山の豊かさをトータルに実感できる施設だ。ワイン業界のタブーに挑戦し、ここまで実現してきたビジョンのすごさを感じた。

萩原 4年の歳月をかけて成熟してきた施設。素晴らしい景観の中、デザインし過ぎることなく、しかしディテールにこだわったデザインが見事。海と山それぞれの豊かさを取り入れ、両者を繋ぎ循環させていこうとデザインされた場所だと感じた。

富山デザインウエーブでは10月2日、富山デザインコンペティション2015の審査員3名とともに、見学・視察ツアーを行いました。このツアーは、県内にある話題の建築物を訪問し、そのコンセプトやデザイン・設計、施設の運営、周辺への影響などを学んでもらうことを目的としています。

今回は、2014年秋にオープンしたゲストハウスが人気のSAYS FARM(氷見市)、2015年8月にオープンしたばかりの隈研吾氏設計の富山市ガラス美術館を見学しました。

富山市ガラス美術館

富山市西町5番1号 TEL.076-461-3100



「TOYAMAキラリ」は、富山市の市街地再開発事業として建設された複合施設。2015年8月にオープンし、富山市ガラス美術館や市立図書館本館、民間の商業施設などが入居しています。建築設計は、世界的建築家で富山市の政策参与を務める隈研吾氏。ガラス、石、アルミなど異素材を組み合わせたユニークな外観と、五層のフロアを天空に向かい斜めに突き抜ける内部空間が特徴的な建物です。

富山市ガラス美術館は、「ガラスの街とやま」のシンボルであり、富山市所蔵の現代ガラス美術作品などを展示。また6階「グラス・アート・ガーデン」には、現代ガラス美術の巨匠ディール・チーフリーの工房が制作したインスタレーションが展示されています。

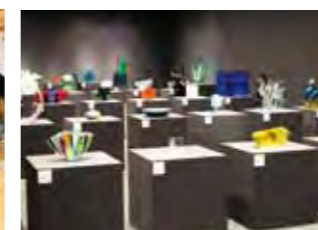
鈴木 今や「富山素材」としてすっかり定着した感がある「ガラス」。30年にわたり「ガラスの街づくり」を進めてきた歴史や文化がここに集約されている。その蓄積の「すこみ」を感じることができた。

鈴野 立地的にもパワーのある場所に、隈氏ならではの強い個性をもつ空間が誕生した。しかしまだ「余白」の部分がたくさんあると感じた。これから運営方法なども含めたソフト面を充実していくことで、地域にとってさらに価値のある施設になっていくと思う。

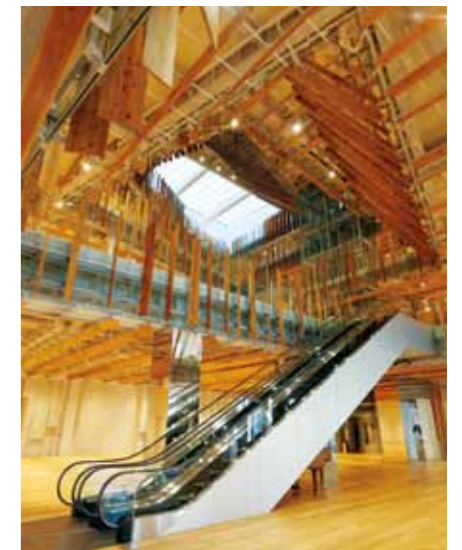
萩原 建物の中にある市立図書館本館が、中高生たちでいっぱいだったのが印象的。建物の力で図書館も魅力的になっている。この図書館とガラス美術館との共存が今後どう進んでいくか、とても興味深い。ここで本を読んだ子どもたちが、やがてガラスの道に入っていくかもしれない—そんな思いに駆られた。



グラス・アート・パサージュ



コレクション展



富山から発信するクリエイティブの新しい波

富山デザインウィーク

富山デザインウィーク2015のほか、10月の第1週の土日を中心に、富山市と高岡市でデザイン、クラフト関連の多彩なイベントが開催されました。各会場には、時代をリードする創造性豊かなデザインと、工芸都市高岡の伝統を活かしながら新しいうねりを見せるクラフトの作品群が展示され、詰めかけた多くの来場者を魅了しました。11月にはこれらの展示の中から、デザイン・クラフトコンペの優秀作品を一堂で紹介する「TOYAMA DESIGN WEEK 2015 巡回展」も開催されました。

富山デザインウィーク2015展

会期: 10月1日(木)~10月6日(火)

会場: ウイング・ウイング高岡

「富山デザインウィーク2015」事業の作品展示会が、10月1日~6日、ウイング・ウイング高岡(高岡市)で開催されました。会場には「富山デザインコンペティション」の1次審査通過作品、「富山マテリアルワークショップ」で制作された作品、コンペ審査員3名の作品展示が行われ、新しいデザインの息吹を伝えました。



第55回富山県デザイン展

会期: 10月2日(金)~10月4日(日)

会場: 富山県高岡文化ホール1F

今年で55回目の開催となる県内公募展の草分けとなるイベント。建築・環境、インテリア・ディスプレイ、グラフィック、工業デザイン、クラフト・ファッション、デジタルコンテンツなど多彩なジャンルの作品が展示されました。寺田尚樹氏、宮晶子氏、永田宙郷氏を招いての審査会で、「さばの熟ずしパッケージ」を提案した林久美氏が最高賞である富山県知事賞を受賞されました。



さばの熟ずしパッケージ



富山デザインフェア2015

会期: 10月2日(金)~10月4日(日)

会場: 富山市民プラザ2F、デザインサロン富山

19回目の開催となった今年のテーマは、「幸せをわかちあうデザイン」。パッケージデザインや広告、ポスター、ディスプレイなど、県内外の商業デザインジャンルの優秀作品の展示のほか、アートディレクター・グラフィックデザイナー・高田唯氏、(公社)日本パッケージデザイン協会副理事長・伊藤透氏による「デザインセミナー」などが実施されました。



工芸都市高岡2015クラフト展

会期: 10月1日(木)~10月5日(月)

会場: 大和高岡店4F

今年で29回目を迎えた全国公募「高岡クラフトコンペティション」の入選・入賞作品約500点を一同に展示、予約販売するイベント。クラフト作品との出会いを求め、多くの来場者が会場を訪れました。グランプリには坂本茂氏のヒノキ・鹿革の椅子「dorayaki-stool」、宮尾洋輔氏のガラスの花器「花入れ-浮遊-」が選ばれました。



dorayaki-stool

花入れ-浮遊-

高岡クラフト市場街

会期: 10月1日(木)~10月5日(月)

会場: 高岡市中心市街地約35ヶ所

中心市街地の商店や飲食店などを舞台に、多くの企画でクラフトと街並みの魅力を楽しんでもらうイベント。全国のクラフト作家や高岡地場産業の作品展示と販売、工場見学やものづくりワークショップ、食とクラフトのコラボなど、多彩な催しが行われました。





富山で生まれる、次のデザイン。

toyama design wave

発行日	2016年2月1日発行
編集・発行	デザインウエーブ開催委員会
事務局	富山県総合デザインセンター 〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0510 FAX.0766-63-6830 ホームページ http://dw.toyamadesign.jp/
主催	デザインウエーブ開催委員会
共催	(株)富山県産業高度化センター (一財)富山県産業創造センター、(公社)富山県デザイン協会
後援	経済産業省中部経済産業局、(公財)日本デザイン振興会、 (公社)日本インダストリアルデザイナー協会、 (公財)富山県新世紀産業機構、 (独法)日本貿易振興機構富山貿易情報センター、 北日本新聞社、富山新聞社、読売新聞北陸支社、 中日新聞富山支局、日本経済新聞社富山支局、日刊工業新聞社、 朝日新聞富山総局、毎日新聞富山支局、 富山放送局 、 北日本放送、富山テレビ放送、チューリップテレビ、富山エフエム放送、 (一社)富山県アルミ産業協会、富山県プラスチック工業会、 富山・ミラノデザイン交流倶楽部、高岡商工会議所
監修	大矢寿雄
編集・構成	仁木久司／柳瀬経夫／窪英明／堂本拓哉／吉田絵美／ 平野尊治／玄千賀子
デザインディレクター	桐山登士樹
クリエイティブディレクター	加藤嘉一郎
デザイン	水巻さゆり
ライター	中谷裕也
撮影	道林伸一／本田万里
印刷・製本	とうざわ印刷工芸(株)